



螺旋のゆくえ

残酷な疼き

うかみ綾乃・作
nira.・絵

螺旋のゆくえ

～残酷な疼き



「真央梨——！」

学食でのランチを終え、三限目の授業に向かっていると、幼馴染の駿が追いかけてきた。



「どうしたの？」

「いや、その……今日、お母さんの四十九日しじゅうくにちだよね」

「ああ……そうね」

心配顔の駿に、ついそっけなく
答えてしまう。

先月、母が死んだ。

突然の交通事故だった。

「俺に手伝えることがあつたら、
なんでもするから言つてくれよ。
クリニックのこともあるし、お
まえひとりじゃ、心配だし……」

「大丈夫だつてば」

母のことは、誰にも口出しされ
たくない。幼馴染の駿にも……

なにか訊^きかれても、どう答えて
いいのかも、わからない。

母は、遺伝医学の研究者であり、
医師だった。

定期的に訪れる特定のクライア
ントたちに、カウンセリングを
行なっていたようだった。

その仕事の内容がどんなものなのか、何度訊^きいても教えてはくれなかった。

「ねえ、あなた……吉崎^{よしざき}先生の
お嬢^{じょう}さんよね」

帰宅したところで声をかけてき
たのは、三十代半^{なか}ばくらいの女
性だった。

どうやら、母のクライアントの
ひとりらしい。

「申し訳ありません。当クリニックは先月、閉院いたしまして」

「え……どうして！ 吉崎先生でなければ駄目^{だめ}なのよ！ 先生はどこ！ どこなの！」

叫^{さけ}ぶ姿は狂気じみていた。

「落ちついてください」

「先生を呼んでえっ！」

ますます大きな悲鳴をあげ、
途方^{とほう}に暮れかけたとき、

「よろしければ、僕が」



「僕が診^みます」

見知らぬ男の、唐突^{とうとつ}な台詞^{せりふ}に、
真央梨は眉^{まゆ}をひそめた。

齡^{とし}は三十手前くらいだろうか。

落ち着きのある切れ長の眼。
姿勢の良い長身。

なぜだか威^い圧^{あつ}される感覚を覚え、
真央梨が黙^{だま}り込んだ隙^{すき}に、その
男が女に向かつて言った。

「僕は吉崎先生の後輩です。直^{じか}
に教えを受けていますので、同
様の治療をさせていただけます」

一時間後、その女性が穏^{おだ}やかな
笑みを浮かべて診察室から出て
行ったあと、真央梨は、その男
の元へ向かった。

「母のクリニックで、勝手なこ
とをしないでください！」



「あなたは誰なの？ なぜ、この
診察室の鍵かぎを持っているの？」

「あなたのお母さんから、鍵を
託たくされた」



顔立ちは整っているが、憂鬱^{ゆううつ}な
影が刻^{きざ}まれた横顔。

彼は表情なく、ファイルをめく
っている。

「……それ、何が書かれてるの」



初めてまともに眼が合つて、瞬間、心臓がひくつと疼いた。うず

思わず顔を逸そらしかけ、だが瞳ひとみが彼に止まつたまま、動かない。

窓から漏もれる夕刻の薄明かりごと、この体が吸い込まれていきそうになる。

「さっきのような患者が、今後
も訪ねて来るだろう」

彼の眼は、あくまで冷ややかだ
つた。

「俺に、このクリニックを預か
らせてくれないか」



「悪いようにはしない。俺にと
つてきみのお母さんは恩人だ。
きみのために、最善を尽くす」



私はいま、自分がなにを知らないのか、それさえも分からない。

でも、この人は――

——治療って、何をするの……

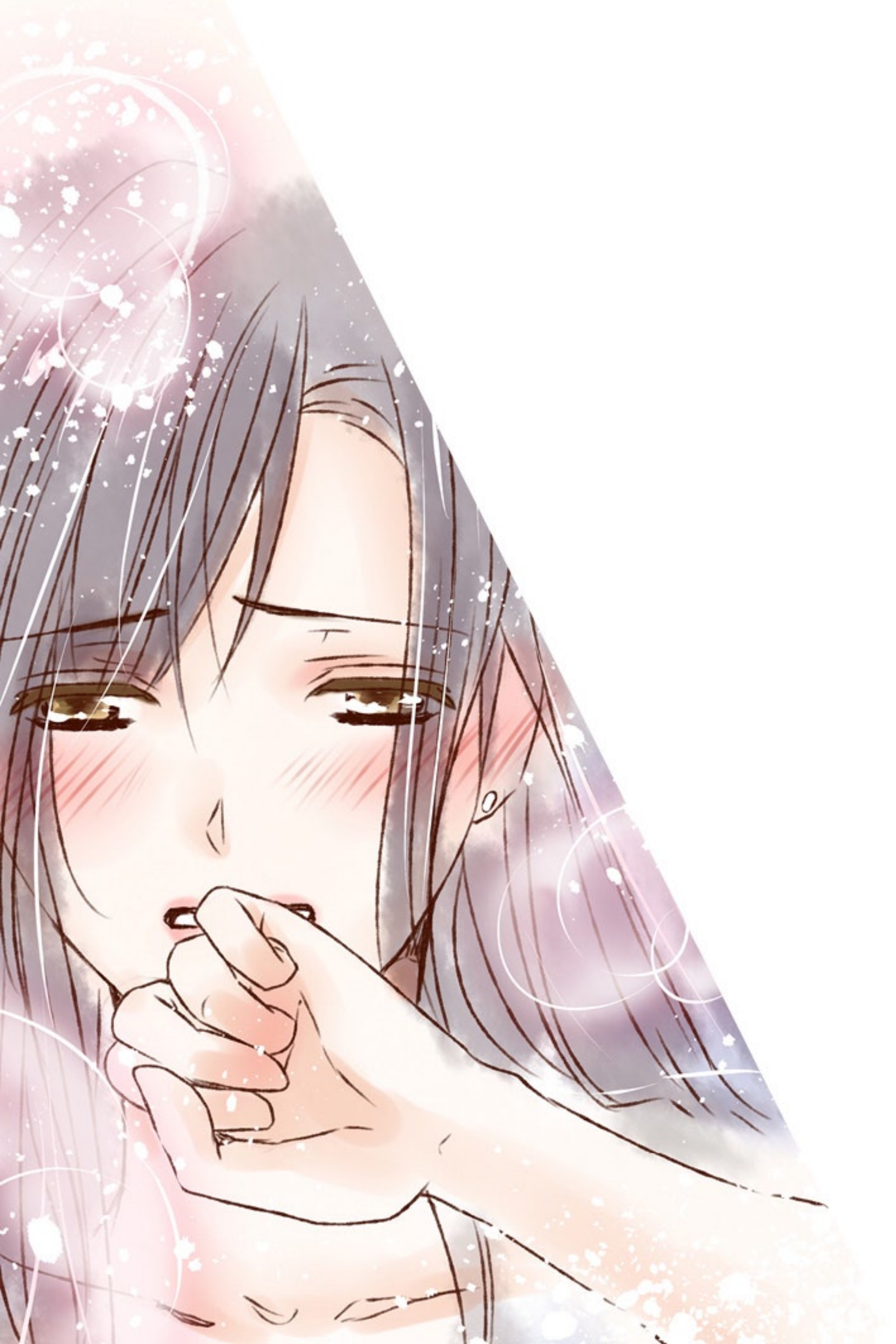


診察台の上で、女が大きく脚^{あし}を
……

これ以上、見たくない……

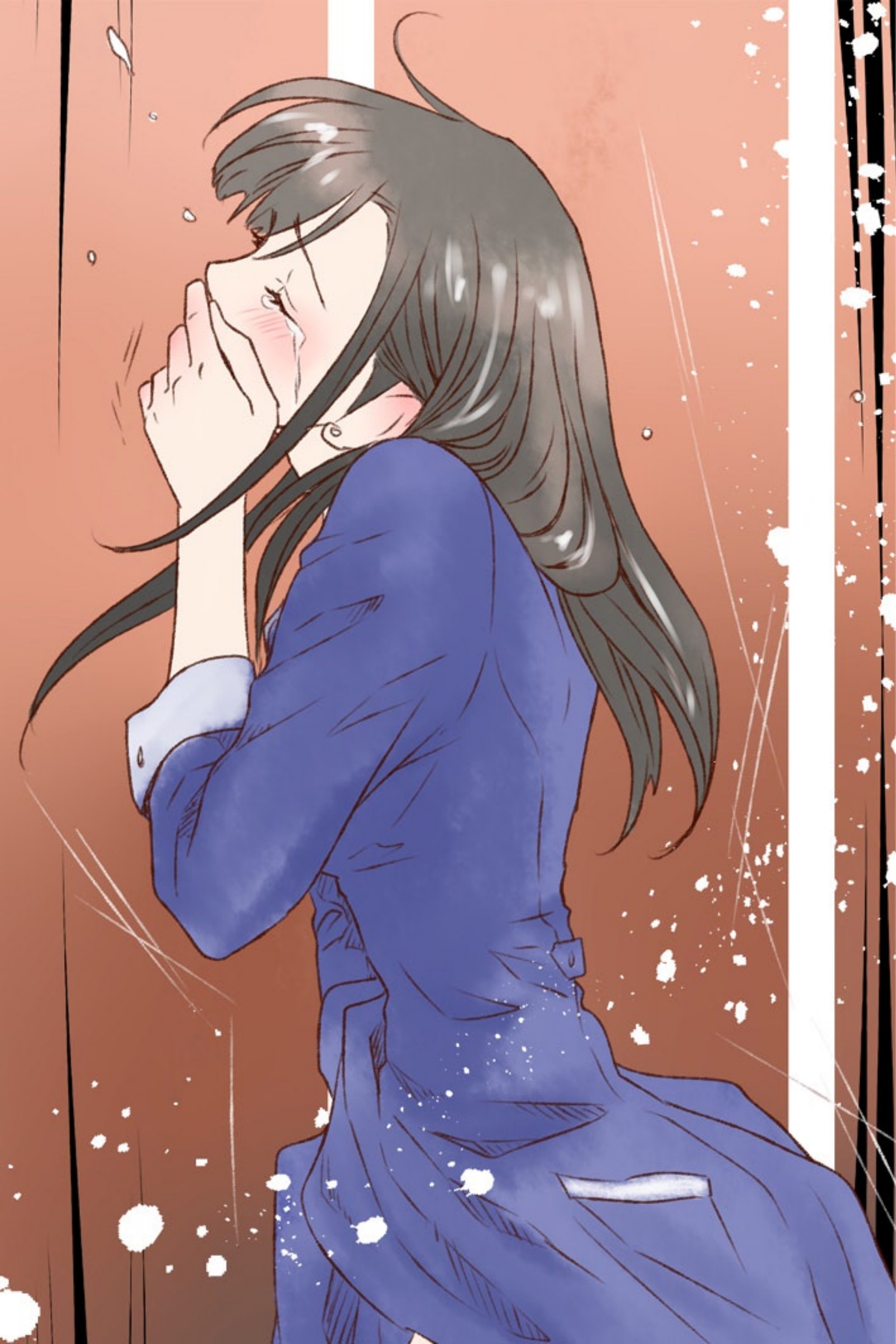
見たくないのに……

息をするのも忘れそうになる。



からだの奥で渦巻うずまいている妖あやし
い疼うずきを、探うつてしまおう……

ここが、溶とけてしまいそう……



「いずれ、すべてを話す。

そのために、俺はこうして、
きみのそばにいる」



母を亡くした直後に、

突然現われた、

冷徹な医師・打水祐介。
うちみずゆうすけ

自分の肉体に、

得^{えたい}体の知れない謎^{なぞ}を感じている、

医大生・吉崎真央梨。

わたしとあなたの体には、
螺旋らせんのことが刻まれている。

ひそやかに皮膚の下でざわめき、
同じ血を持つ者を求めている。

これは、ひよつとして、なにか
の傷跡？

だとしたら、ねえ、どれくらい
痛かった？

私が舐^なめたら、その痛みを、
少しでも癒^{いや}せるの——？

『螺旋ゆくえ～残酷な疼き』

うかみ綾乃／作
nira.／絵

©2015 うかみ綾乃 /nira.
©parsola inc.